



## 新コラム Communication Box

桐村 亮



Communication Box (以下CB) は、通常の見出しごとの記述とは別に、「依頼する」「説得する」や「賛否を尋ねる」のようにコミュニケーション上の目的や場面別に用例を整理したコラムです。その目的や場面に必要であろう多様な英語表現が一か所に集められている点が特徴です。「喜び」「落胆」のような感情を伝える表現も加えて、計40項目があります。

### たとえば友人を「励ます」とき

たとえば、落ち込んでいる友人を励ましたいと思います。適切な表現をどのように探せばよいでしょうか。和英辞典で「励ます」を引くと、もちろん、「励ます」に相当する encourage や cheer up とその用例 I encouraged him to try again. などにとどり着きます。しかし、実際にどのような表現で友人を励ませばよいか、の問いは未解決です。まさか相手に I encourage you. (あなたを励ます) などと言って励ますことはありません。

そこでCBです。『ジーニアス和英辞典』第3版で「励ます」を引くと、通常の「励ます」の項の隣に、青いラインで囲まれたコラム、つまりCBが目につきます。ここには「励ます」表現として、場面別に分類された30近い用例が挙げられています。分類の説明に導かれながら用例の英語(と併記されるその日本語訳)を眺めれば、自分の状況にぴったりくる表現をみつけることができます。

「励ます」表現を様々な角度から集めています。例えば、Forget about it. (そのことは忘れ

なさい)、Never give up. (絶対あきらめるな)、I'm on your side. (僕は君の味方だよ)などは、それぞれ意味は全く違いますし、使う相手や場面も異なりますが、確かに「励ます」ときに使う表現です。日常考えられる様々な「励ます」場面を想定して表現を集めていますので、どのような言葉で励ますかをあれこれ(日本語で)考えて和英を数回引くという手間が省けます。

また、漠然と励まそうと思っていた場合でも、CBの用例を見ているうちに「こんな表現があるのか」と、自分の伝えたい具体的な内容に気づくこともあるでしょう。発展的学習者は、「励ます」用例から発展して、自分が伝えたいことが「君の味方だ」と気づけば、「味方」の項を調べて、他の表現へと幅を広げていくこともできます。

### 日本語を介さずに英語発信へ

このコラム作成の出発点は、日本語話者が、英語で何かメッセージを発信したいときに、それに「相当する日本語が先にあるとは限らない」という点です。多くの場合、伝えたい日本語がある前に、まず伝える「目的」があって、「相手」がいて、「場面」があるはずで、その目的や場面から検索して、(必ずしも日本語を介さずに)適切な英語表現にとどり着く必要がある、という発想です。

和英辞典の役割は、文字通り、日本語を英語にする作業を助けることが第一ですから、この発想は言わば規格外かもしれません。しかし、「英語での発信」というキーワードのもと、和英辞典

が、本業の「日本語→英語」機能に加えて、「目的→英語」機能を持つことは重要です。英和辞典（英語→日本語）にも、英英辞典（英語→英語での定義）にも、類語辞典（英語→他の言い回し）にもない役割が和英辞典に付加されることとなります。

このため用例の配列も、英語が左側、日本語が右側に置かれています。流れとして、英文が先に目に飛び込んでくる点が重要です。自分が伝えたい場面や目的がはっきりしたなら、日本語からではなく、直接、英語の用例に目を向けます。そのとき、右側の日本語訳は「主」ではなく「従」、つまり参考程度に見るだけです。これにより、日本語訳に縛られずに、目的に応じた英語表現をより素早くみつけることができます。もちろん、右側の日本語から先に見て用例を探すことや、用例の上にある分類説明から絞り込むことも可能であり、習熟度やスタイルの異なる学習者にも対応しています。

こうした目的・場面別表現集は、アイデアとして新しいものではありません。たとえばOxford University Pressの*Function in English* (1982)は、Asking for information, Saying something is correct, Expressing surprise, Changing the subjectといったコミュニケーション「機能」を見出しとして、そのもとに表現例を集めているし、Longmanの*Activator*は、キーとなる「概念」から関連表現にたどり着けるという意味で、「目的→英語表現」に近い使い方ができます。ただ、これらが日本の英語学習者に浸透しているとは言いがたく、このような目的・場面別表現集を、どのような形で日本の学習者に紹介していくかは、日本人の英語発信力向上を支える辞書や参考書開発において、重要な検討事項の一つと言えるでしょう。

### 相手や状況で激しく変わるコミュニケーション

機能別にずらりと並んだ用例を眺めて、改めて

気づかされることは、同じ機能で括って集めていても、これだけ多彩な表現方法が存在するのか、という点です。一例を挙げると、英語で「怒り」を相手に伝えたいときは、どのような表現が適切でしょうか。「怒っている=angry」で、I'm angry. と言うこともあるかもしれませんが、これは、怒りのわりには、少々冷静な自己分析のよう。CBでは、命令文でLook what you've done. と言ったり、疑問文でWhat do you think you are doing? と尋ねたり、ときに感嘆文だったり、様々な形態の「怒り」表現が例示されています。

いや、実際、「怒り」の根本は、言葉よりも感情だから、どんな表現にも怒りを込められるはず。たとえば、Christine! と相手の名前を言うだけでも、口調や表情によっては、怒りが伝わります。しかし一方で、怒りを表す場面が、必ずしも、親しい間柄でのやりとりとは限りません。目上の人にどうしても自分の怒りを伝えないといけないこともあるでしょう。表情の見えないEメールで怒りを伝えることもあるでしょう。そんな場合の表現についても、学習者としては知る必要があります。

このように考えていくと、英語で「話す」「書く」ということは、「日本語→英語」の変換というよりは、まず相手がいて、心があって、場面があっての、生きた「コミュニケーション」だと再確認させられます。そして、英語は「学習の対象」や「暗記の対象」である前に、人とのコミュニケーションを行うためのダイナミックなツールであるということ。これを学習者にも感じ、考えてほしいと願います。

順序が前後しましたが、各コラムの冒頭には、日英の文化的な違いによるコミュニケーション上の注意点も簡潔に書かれていて参考になるはずです。「調べる」辞書としてはもちろん、「読む」「考える」辞書として大いに使ってほしいと思います。

(きりむら りょう・立命館大学准教授)